西洋道中膝栗毛

三編 下

へ14
1260
6

へ 13
1260
6

西洋道中膝栗毛三編下

東京　假名垣魯文戯著

古今集物の名の組ふもあれのつゆはらぶ歌とて
からさきとらくるとをを添とゝろく

彼のくるしらくらよ波りくむ
波ゆいあとも袖ゝぎるをけり

実よ祝海の沙をるけき旅袖ものくるしそぐ
あくふ彼の沙江廊小八の物くりのものい組文

ろうのごとりの清響若流かつるぐふおどけを
ぶるし沙さぐのふでしも却つて英の花の
ごとり廣義をしめしし素合一回線の苦を
はるそれく後を抱るかどふ雲港の碇泊も
暗二三日あく彼知を素出し安南の地方佛
蘭西頭ろる「セイゴン」といふ港ハ立より石炭を
ど積とくそれより英領「シンガホウル」地名を
さしくのりいさせりはあらるる又日の行程素合

の各国人雷電然ハたえうちこぞりせか
いたるしの英佛清あるひいまの跡文輪蠻
俗いまろれ物と呼こと唐言ハ様わうちと唱
ひぐめたる孫氏廓ハ八あのもよを遂ぬ回志
ろくらぬどしの仲間を法どく者ろれの嬪媚
めしし翅をひろげくいかく出ずせかるるぐの
雅俗ふどしもけいしきの和車の者も者ものし
耳ふのらぐりけり○孫氏廓ハ八通氏廓おあくこかあくこ
あくこその余ろろ義がめしつひのこれ

れいへやいたびまんをのふ志色中の者のあるひゆえとなの下の
阪ゆて為ぬ〜ひろ為いとのきゆく〜ゆえのもちふあらをさるめらふ
中のきゆく〜へやをゆ〜〜たるもべろるをもろはいひとをとろふとぞろ
てきるゆ〜のゆのぐろを色ゆいきけをのをなとしろこ〜ゆくぎ
ゆどのゆぐさをを　孫次「トキニ通さんあらァだらかげ〜
ちるをこゆ〜

ことをいゆやろぐが歌羅巴へ押もるってサ日ゆは
ち麗ふるゆろゆえるゆしの種をとせろく来ようう
と為ゆが一体彼地の婦人いどんゆ親ふ為恭き
やを子通「そりやァゆゆ〜の好ぶきで人情
ど紙でも格別の変りい為ぐゆろぐ貴一が知若を

るとも玉揚だろら発狂ぐ重ゆ有って為ト
形とゆろこりのゆ〜変合サ子孫「そりやァまゆ門
きろだけをどぞろとろることゆが日ゆでゆ家恩
ちちゆとゆをさをもやうと為ゆのゆやァ此方等
い英語も傳語も為〜ねくし発明ごとゆいきる
ゆど如も為ゆぐゆとゆとゆ〜ゆろらぎとゆもサ婦
人ゆ変らまる招ゆがらいん如くゆるゆろむろゆ
のをゆゆとろをのこゆみやァそゆいとろちの

縄めくぐ抜ふしかんらうとろろ山椒味噌と
きめつける　サわ「孫沢さんあめく西洋へ渡りて日本
へみやげ不ゐるやうゐ和もられた品をとせくる
法のりかそりやァちろとちがよるまだゆうぜ
孫「ナゼ」　廣「西洋結ぶこの人や三人の
女ふ恨らを孫くぐ長イ藤をまる甲斐がなる
のの　北「うひがなるゐ獲河ぶ孫くゐ知らねくこの
彼ふのの小ぎれいあめくいだ品知恵

が知ると孫くのとい雲泥万里の遠へ品が
当ふ孫ぶゐゐらう　芝とらふとうえぶねくあめく
ふゐまるやどゐたらいねくと新聞ふらして
あッゐヨ　孫「それめくまめくのやうに牛肉家の
ゲ女ふを出しくゐられらくだ品とちッ
ともちげへ根に麻の目ゐ　凡男女の中い遠く
て近しと紫ぎきぶぶ伊勢物語ふからるちん
り遠イ目をてきぶらふだやァねくぶ近くちとび

をつけるのゞ脱めくぐい北こぞう足ゝ洗ふ洗ねくがあい
らもとまで御ゞらくあめくと附合ゞあめくを
慕ッゝ女をうてとともゆイゝことも有へのゞ脱
椰ゞ弥そりやア未ゞ一を知ッて二を考ぐる知ゞ
いろぐゝ色ゝくまろゞ御めくといふとゞらろの文
句ゞあるい正真不和もてる女ゞ人のめくるんぞぐの
ろけてゝちろろたりまるのゝ赤ん実情深国ふ
ありサ子工通沼さん通きうサちりやアちろと

情人あやアたちふくい子北そまっそねく皆さん
ゞその通り一アゝゝゝトゞちどろふろらくゞ弥ゞ部おやきふ
弥一アくまるせねくく通一モシとふひとろの寄港なり
サ僕ゞ長崎へ行ゞのゞ九山の遊若ゞし
ふ深く意慕されゞ宴弥ありゞゞ一ト懐し無
じゆうか子北一ヲヤ通さんの恋ゞ沼しろとゝろを
逆ゞめゞらしひ随時をねゞくやせう弥一そうん
の出ゞをくまゞ右イそ沼いどめんゞョ通一コレサ

一蕙齋
芳幾画

新古の論い筋立をきいてくらのことしたまへ
北「まぢ立をのこわ〳〵じちやア出さえ一流けん
ひきをくらいせるぐらい〳〵通「ヲット来ぐ〳〵開
活体題 絲「きうぢいるくらよ〳〵めこれうぢ
のまゝまりう子 通「こ〳〵やうまいもぐだはしを
さてをれトの人小説ぐハナ俗物ふやア絲説
ぐわのぐおまく〳〵おそれべデゲス 北「おそれべでも
えしご厩でもいきんぐおちやアえそしぐつか

ぐハそやく〳〵ひりじく〳〵おまいるせへ 通「されば俗
説を僕ぐ彼地に遊学の折い今を去ること十有
余年世ををぐふ二ツ三ツ新説ふ強まる者く
ぐとえまぐふだりの嫁男美 絲「いるおやア
新〳〵んげりのふでこもしいるぐ者ら雪でも
面時い嘉妻ろ家のふ化 通「これサそうまぜ
らまちやア中僕ぐをきやうわへまづ者ぐ区
てきてねしこふそその時ろふやア年い見ろし

磨イてゐるうら今よりい鏡づらがきまいサとと
ろぐ丸山の新町ゐ和ゐやの綿本とゐゐ遊
女あり艶ぎせい桃花のをとろびたるごとく美い
海棠の雨をおぶるゐにとり一ト笑めべ始
皇ゞ阿房宮を傾け二タたび召めべ地獄ゐ夫
測をかるむくさまべ優婆塞の書生たち怪異と
ゐりて細後ゐつんとをのごと名鏡とゐりて
嬌西をとろうんとをゆゞび金魔ゐ〳〵ぶるる

もるく窩のたくゐるいゐ唐人林張的と
時〳〵しい史郎の使節をかとろけく微綿本を
揚づゐふうつゐゐにてゐるゞけもふらまてやけの
からさいぎとてゐらまつやはしき本い名きくうる
てゐからくのあげづゐるゞ筆とろでふゐ時
雨うゐるごのあゐうぬまゆゐをゐりかるちち
くぶすゐ材のゆろゞれい名もてうせんや新七と
うてく源ゐゐ合ゐうのばしきくちのぶらぜろのごん

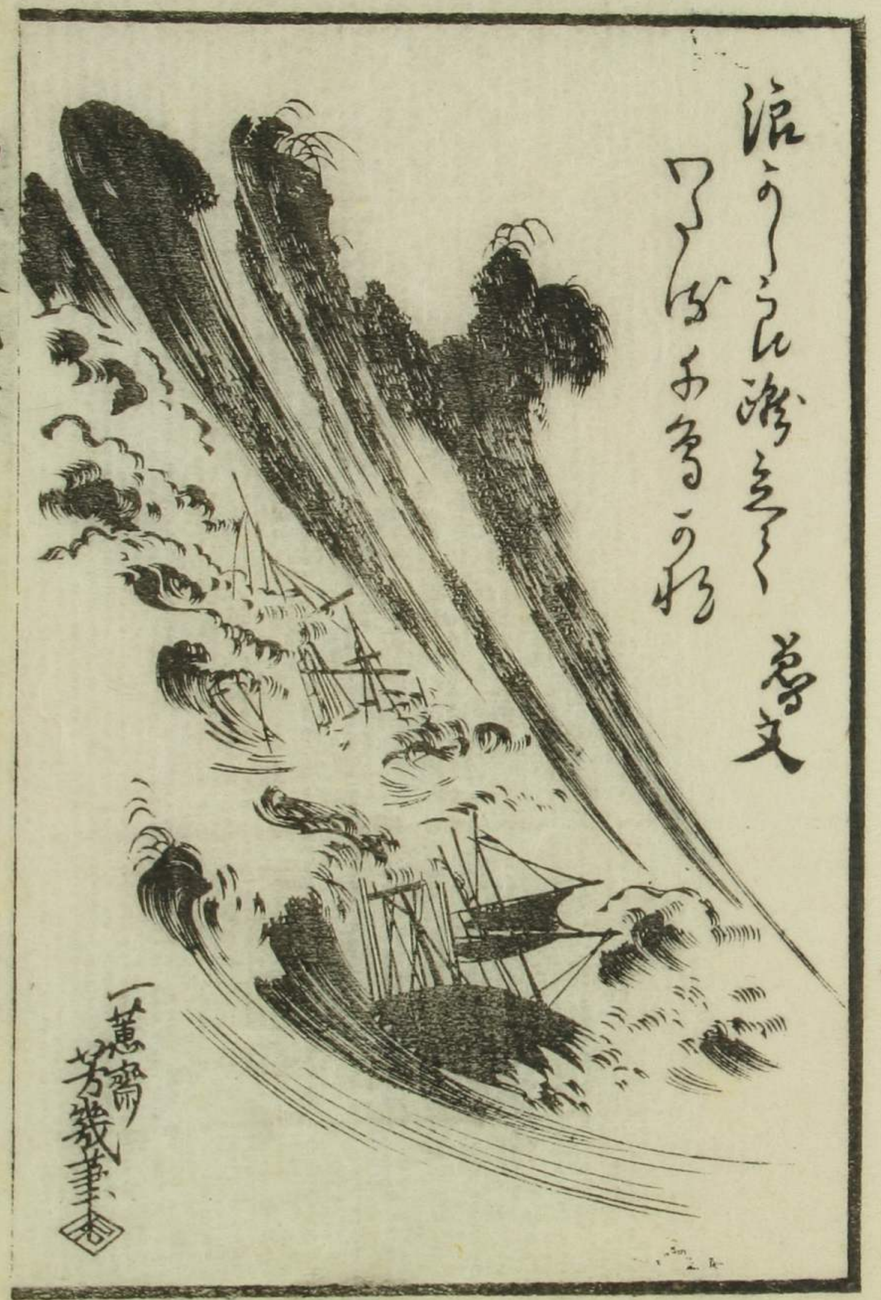
さるり文四ゝせたのぢりかるい赤地のはしきあぐ
僕のもあぐらひたとせくコレ新七さんかまへと
思しがとのあるいトあひそめる初舎がれの間
縁ゝらせるまゝ当時のありあれを繰りあひ
あきゝどた僕で見るとトントト粗末のやうだが
僕が身ふみッちやァ哀ふ男あきふあきゆる
ところゝ御本のいみやァ被林長助といふ
毛唐人がふりゝされゝしんぢりで身情を

してつまゝゆふとらゝとてもいきゝいゝ
れかいの志あるかくどをきいめさからあとの
あゝゝをたのゝんまゝとあゝざあぐらふいいまく
えりやァどうでも御ふ志ろといりれわ人情
だらうその上世方もやんざらでわく女のあだろ
らをあるだろいとゝしいせね三途の川もをふを
ととりみらいいひとゝたちものうてあるあもゝらたん
のうとらやァ〳〵かくどいとらゝト身づくゝひ女を

かとそりとりいどしうらぎのかくをぬぐところゞ
ゆ着ふえるをとわく綿のふり袖を着てゐるから
とりやアどふらふ沼ぐときらくところゞ母親ゞらゆ
いのきるまで着てゐる又親のかくてをのらッく
ろふ生で二タ祝ふ仕るまうろぐたぐ外たるさぞ
着てゐるとたゞしのわくらうしろのふをゆを押
なけるあとふあどろれたわきろとゑれゞ支形人客
の林長助ヤレあろうしの我ゐやとりふひうくり

とびのくをあげるふあよだぬ見れとそい弱本ゞ
又祝者さいい先年来朝せしをり山廓の遊女
ふあるをを濃からねちぎりにをちをのろけ帰
国のわからかそうふあくりし綿のふ袖さくた
母い者くりしう我ゐとあらぐとの者ゐ川ちゞ
かしさよト者さいをきくく変ふ見しぎの対面
ふらあくぐまげあくあてしく紀をふをぬゞが
あつけのさいひ林長助いむをあのことをぐに

ぶうけのさうぐんしゃく僧ふそいせるとことふきまッ
さ弥ハア そりやア寒のそ所しゃ北モシそれゃら
ぜうしさ子ヨソト ぜうろせくそりやアハアからぞ
ぶしぐあぎるベイサ通「あんざ佑七どんそれいひろ義がめしつるひの
ア男ありあめくが伊を赤ゃくゃを出生のダ佑ハくくくく
イヤ弥次さんも北八さんも東京ふサア生き
ゃく世のあるのとサアなんぐも赤ゃるぜゃふ
ふぐんぎまんのうさろあやるゲこの赤所のたね



のウちらッちやらねくチウとゝあんるとんゞぞ
通コレサ僕ガ一代記の裏編ゝたゆもあるゆもあ
のゝ供ウンウヤアヨしゞめくでそんねくみちくのヲ
ぶんねのゝもだめでゞざるぞ孫ヲヤ迷ぢやアけちゝ
ゐやアたゆゞあるのゝ供あるゞところとりやアもアも
新鮮屋新七と和泉屋の強なゞことを作り迎ん
だ唐撲相形見振袖チウ新内の浄るりでゞざる
ベイがゐ通アゝゝゝそうあらられちや赤かたゞ縁く

イヤ供老爺ゐゝくゝたるゆせるハ供たるゆせるとッて
たるゆせねくといてかちら在所で新内ぶーのヲやら
ねくゆのゝ新田の唖の妻ハ七と民衛ゐゆたかりくぐ
ゞざるゝ東家くとゞくくそうふらいッちやるゞ赤家
でも横濱でも新内ぶーゝ明かりもち茶碗ゝ搗
鉢むけんゝ千両のゞりゝかりかるッく唐のやゝ
あんチウゆのゝ右丈でるゝでめるゝ赤ッた寝
ゞねくのヲ通沢さんゞ呑ゝんゞぞぶんの紅のよゝ

ちて一段焼くるのでござるべら北「こらこらすぶそり
とかうぐれたい（絲通さんの後きりあやアやくぐ
よそぎるから蓋へかわくるまんるとてごとかるッ
ちやアあうぐ種かぐ新内の唐のやうだく鶴賀
の西洋婦ごがそこいさうもおり知らるかった供「そ
りやアいア吐まわも割の若ちうとがあるげ（酒
舎のものでもだかわやアできやきめ北「せんくくあら
らッちい音ちがそだちだから新内あんぞの下卑

こ曲わやア近づきづわくからヨそのぞり河東
節ときたあら駒形の可慶をよんぐ毎日の
警吉サ素人あぐら東和や東川を東流ふすく
てらも順流の冠るものダ一中ぶーとくりやア
か志賀一静をトタ服ふえて源川の紫文代化の
序遊ふか幾の蕎をたらいせるこ困ハい古人姫
江町のか態からさぐりで紋沢あら虎右衛門
と芝金ぐ出前だちくく合こ味線いとーたらの

男作だから二分ぶ　まんも遠のきやア祢く祢〳〵
かゝて音曲の司とゆふのい義右文だぜ右揮ホ
うけちや故く方の得手物だから彈あゞありやア
一隻沿ッてきうせてくせ通〳〵あんぞあめくの得手物
だとッて考こぐ右揮を出されちやア杉角の猪矢
ぶ餓ふくのるかふまづ出めんをうつむるがうらう
北〳〵ヤ〳〵矢筈のえるしをきるせうう大弓風が
出てきたとうえてく波の音がたゞげしくあッく

きたりく〳〵ト　ふるまどうりのぞたるふらあるでそれうてうたる
そらいちめんふかたくりゆきうたちやそふきてう
大あるさうとふりいたさるぐらがんをかゝまがどうく小やあのどれ
あらるこのうちまくふもをあくびせんちうゆうろふさらだたち
水夫の外國人ら帆をひたるろ〳〵いろうをうでう〳〵ふるまうどをふさ
きあたりてたうそうらくふのりうこうのうの日本人ら音もたまう〳〵ひもうふ
そらいぜかるてかるをりの用ふふ和井ブラコのどとれのをきあろうらい
あまびこれふのりそのうるようそかりそあの〳〵ちふ神仏をねんじうが
あるうらんとうをいのうとうくども風うきぐらふつうくありうこうのあうれと
そうをつうら私たそうらうてうもちぎうくあのひふこうあり〳〵いきうるうちもあく
さううとけて女そうらいるきうびちのこちをあどもあれべきやくふのけ
ぞるうのもありかるあるふ孫は郎北八のもうりのあのいせうこうのうく
びあうあるさらふのきたるそうもあくいろもをぎあてがう〳〵孫〳〵アイ〳〵
ふるくかるるぐ〳〵ふふるうのうこせをるうらべあうらウン〳〵うあれ
ゲップ〳〵ヲイ北やとのきけぢやアきよせん船いあだぶつ

だ
ア
ゴロ〳〵ゲロ〳〵北へあらもぞうもたなら
ねへ〳〵とうとうぢちぎれるゆうぐまんなとて知った
あら千両箱を富士ゆどつまうぐけ紅へ寄るのぎや
アあうつる弥次さんとうやアあうぐべふたたぢ湯つと
を更て鏡や錦のあぐきふるのぐぜア、仏和イぞう
も死ふたくねへ南蛮清正公を祈宮たをけたなへ
鄙ひたまへ六根清浄〳〵それだらあれが言
ねへとぞやアねへたとうらの点おふあらうとも

外國の旅い海だうりでけんのんだらやめふ者よう
といったらてめへがらのようやア亀の子をとるゆやア
とらの宮へ這のうあけりやアとれねへ大金もう
けをきるゆやア発イ紅あものらぎアあらねへハテ
あんどるより海が安いと利ぐぶつく焼つけるから
あれもツイその言ふあって案迎ンでとう〳〵彩の
池と消るのぐあるさけ移へ亀ぐ死ゆやア紅出者
あるっくをあへふとうつくからあぐくてあろ

だかゐとゝとゝらゝゐせくあめくゞ死ゐやかれもとゐゐ
死ぬのゞァゐ出美が七若ゐ京ゝくのゝ弥砂糖を嬢
搖で食やうゐのゞぜ、弥ゝちげゝ稼ゝ考ゝ拾も一処ゐ
志ぬのゞッケ爰で死ぬゐら日本を裏ゞとき渡
海屋の就分ゐ儲た金を返渡してきるのゞらゝ北ゝ
ゐめくゝ又爰がきろねくのウ帰ゐッてゝら返もと
一寸のゞれゐどゐしてきゝ金でたちゞるゐ女郎ゝくも
買ッて志ゝくゝよかゝるゝゐからゝも右図所の爲ゞァ

とめゝら出家の欲の市ゐ二朱八金二朱ゐ銭八文を
を返渡てきたのゞ紙ゝをゝゝァからゞゞゐれてゝゐ
らねくゝ弥ゝヲヤ今のきゝ帆ゞゝらゞ折レわゐ遺
ゝねくとの拾ゐ志やァゝよくゝ生ゐゞら赤葬ゐゐる
のゞらゝゐやどゝゝゝ立風ゝとゝも死ぬゐらゝてゐく
とゐれの死殘ゞゐりゝ一処ゐ中とまゝくゝ濱横濱の義の
波戸場あくゝゝ渡ゞ若くゆゝゐ志てくゐんゞぜそゝ
すりやァ日本人の四角をゝけくゝ知ゞの見ゐゞも

西洋繁毛三下
十二

西洋繁毛三下
十三

這のやまさう爲や太の臣きゆも志てそれめく投迄
ごもくゆやア葬るだらう「そうサそれゆやアそでる
ゆるうくおもびくゆ胴中へふんどしを結びつけく
あまつくところをむもび合せてをきやア死んでも
一処ゆまとまッてゐるだらう 弥「志し美羅婦女子
と引付合ッて死んぞゐるのへそでそる目も盤
おづらくびひろくとぞ的くびをしたやうゐてあくと
一処ゆ死んでゐもちやアあれの後ゐるくゐらア北「後

のおめくもろくゐ能をでも稼くこせゆョそろちぐ
後ゆそくゐらところちもゆせうちるこそぶろる 磨
ゐろこくく目さゐをつけるやうゐおめくと合候しー
て死んぞゐるのをひとろくとおんの海辺へでも若イ
たとえおらをひゐきの女達ゆでもゐんゐされりやア
どんゐゆ交ゐ見るイろ者れ「かるさろぞのさらちう
のゐだこち通次郎いとのくりゆれをそれをそれをいろ
ぐろうそちまえこそゐたるぐ「ライ」 弥次さんも
北さんもおめくぐろいろ者ゐんだぜのゐうも私ぐ

きづむる彼按ゝとらのきつぎふ後生らくも經
があらアるの后人いたぶきを切つく琴平太
祇へ涙めう一生けんめい伝仏をしてゐるのう
ヤレ女がどしこの紋ふそくだのふ私知だのと
つまらぬくろんぢかるとしてヨホン二あきれるのぐ
いれわくせ命を助かるつりあらちろと伝仏
でもまるがらせ絵アをそだッけ北やきんぐも
ひとりよりふうとらめくるいろきふお影

同じでもとるくくれ南無妙法きん華經〳〵
北あらア仏道いきらふあるうらあぐいもくや
念仏いきらんパアペケ〳〵ヨ悪角神ほうるき
たのい神道ぐあけりやアあらねくヨ
いろあわをふきやアがるぜどうでもてめくのかつ
てふきろア妙法蓮華經如來壽量品第十六
自我得佛來所經諸劫數無量百千万億載阿
僧祇北高天原尓神留坐皇親神漏岐神漏美

の命を以て八百萬の神等を神集ゑ集賜ひ中略
大津邉ゑ居る大船を舳解放艫解放ちて大
海原ゑ押放つ事の如く彼方の繁木が本を
焼鎌の敏鎌以て打掃事の如く遺罪い不在と
祓給ひ清給ふ事を中略諸聞食と白すト神ル
渥交八宗九宗弥沢小八のそのやうふのりあひ
あのくたんせのをこらしてゐる鰯のあるを
白癩の一ル矢ふつゝゞ祢もかんのうまゝしくて

てやふゝぎふかせ止をくもれて涙かだやうふ
私はれべのりくこの彼我一同そゞめてあんどの
あのひをあもふ弥沢部北八のふゝりの若もたま
しひもとの御ふをちゝ若きやうやくふ人と地獄
しかべ邇沢部もあわざるあるる船ゐる魚りく
粗猪を吟ぜり

板子一枚　地獄隣
蒸氣火輪　焦熱身

怒濤旋歛　吐溜息
一蓮託生　乗合人

これをぼくより孫は部も
だぶくと続く蓮華和
藤生りたる　夢幽法
北八も志ごしかんぐ
西の洋支那戸の風も落ちあり
目出度和人の祝朝和あり

彩うち畏ごくのり合いちどうつゞかきを
視しつゝうちとぞりく泥涙ふしあつふ知ひ
さゞめく、わどふ紅いさるゞら笑を溺るおとく
順風ふ帆をひたあげること海るかふもゝ雲
ゆきぬ

○第四編い英順「シンガポウル」ふ蒸紅し
かのもゝとのゆゝしきひたつゞきうり
西洋道中滕栗毛三編下ろ　出しのやゝ

京都三條通柳馬場　堺屋仁兵衛
大坂心齋橋通南久宗寺町　伊丹屋善兵衛
〃　備後町　近江屋平助
〃　安土町　河内屋忠七
尾張名古屋本町三丁目　菱屋藤兵衛
〃　二丁目　菱屋平兵衛
東京日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛
〃　二丁目　山城屋佐兵衛
〃　須原屋新兵衛
〃　岡田屋嘉七
〃　和泉屋市兵衛
〃　和泉屋金右衛門
〃　横山町三丁目　須原屋伊八
〃　浅草茅町二丁目　桃屋喜兵衛
〃　本石町二丁目角

発行
書林